

沖縄県平和祈念資料館及び八重山平和祈念館
展示更新基本構想

2025（令和7）年1月16日

沖縄県平和祈念資料館

目 次

第1章 沖縄県平和祈念資料館（本館）

1 展示更新の趣旨

（１）経緯	1
（２）展示更新における基本方針	2
（３）検討対象	2

2 展示更新の内容

（１）常設展示室（２階）

① 現状	4
② 課題	4
ア 利用状況を踏まえた対応力の強化	4
イ 展示手法の見直し	4
ウ 老朽化した設備の整備	5
エ 開館以降の歴史的事実の追加	5
オ 新たな調査・研究内容の反映	5
カ 自分に引き寄せて考えることができる展示	5
③ 展示更新の基本的な考え方	5
ア 利用状況を踏まえた対応力の強化	5
イ 展示手法の見直し	5
ウ 老朽化した設備の整備	6
エ 開館以降の歴史的事実の追加	6
オ 新たな調査・研究内容の反映	6
カ 自分に引き寄せて考えることができる展示	6

（２）子ども・プロセス展示室（１階）

① 現状	7
② 課題	7
ア 展示内容の見直し	7
イ 展示手法の見直し	7
ウ 動線・空間利用の見直し	7
エ 平和学習の場としての機能の充実	8
③ 展示更新の基本的な考え方	8
ア 展示内容の見直し	8
イ 展示手法の見直し	8
ウ 動線・空間利用の見直し	9
エ 平和学習の場としての機能の充実	9

(3) 情報ライブラリー（1階）

① 現状	9
② 課題	9
ア ライブラリー機能の充実	9
イ 証言映像の充実	10
ウ 学習の場としての機能の充実	10
エ 多様な来館者に配慮したサービスの向上	10
③ 展示更新の基本的な考え方	10
ア ライブラリー機能の充実	10
イ 証言映像の充実	11
ウ 学習の場としての機能の充実	11
エ 多様な来館者に配慮したサービスの向上	11

第2章 八重山平和祈念館（分館）

1 展示更新の趣旨

(1) 経緯	12
(2) 展示更新における基本方針	13
(3) 検討対象	13

2 展示更新の内容

(1) 常設展示室（第一展示室）

① 現状	13
② 課題	13
ア 展示内容の追加、配置変更、整理	13
イ 展示物の修繕・更新等	14
ウ 証言資料を活用した展示の導入	14
エ 展示・情報発信手法の見直し	14
③ 展示更新の基本的な考え方	14
ア 展示内容の追加、配置変更、整理	14
イ 展示物の修繕・更新等	14
ウ 証言資料を活用した展示の導入	15
エ 展示・情報発信手法の見直し	15

第3章 本構想を踏まえた基本計画の策定

基本計画の策定について	16
-------------	----

第1章 沖縄県平和祈念資料館（本館）

1 展示更新の趣旨

（1）経緯

沖縄県立平和祈念資料館（以下、「旧資料館」という。）は、1975（昭和50）年、県民の戦争体験を結集し、戦没者の追悼と沖縄戦の教訓を正しく次の世代に伝え、もって全世界の人々に恒久平和を訴えるために設立された。

旧資料館は、沖縄戦を通じ、住民の視点から戦争の非人間性と残忍性を告発した画期的な施設として重要な役割を果たしてきたが、施設の狭隘化により、沖縄戦の実相を展示することができず、老朽化も相まって、平和事業活動や企画展示、資料収蔵等に支障が出る等の課題を抱えていた。

また、沖縄戦終結後も、27年に及ぶ米国による統治や、日本復帰後も残る広大な米軍基地の存在によって、沖縄は常に世界の戦場と隣り合わせの生活を強いられ、現在まで続く軍人、軍属による事件・事故、人権侵害や基地被害の現状と苦闘の中、人間の尊厳を踏みにじる「構造的暴力」に直面させられてきた。

沖縄戦から戦後に至るこの歴史的体験を通じ、つちかってきた“沖縄のこころ”とは、「人間の尊厳を何よりも重く見て、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心」である。

戦争の犠牲になった多くの霊を弔い、沖縄戦の歴史的教訓を正しく次世代に伝え、全世界に“沖縄のこころ”を発信し、もって世界の恒久平和の樹立に寄与する施設として、旧資料館を移転改築し、2000（平成12）年、沖縄県平和祈念資料館（以下、「現資料館」という。）が開館した。現資料館は、旧資料館と比較し、延べ面積が約10倍、展示面積が約5倍に拡大し、旧資料館の沖縄戦の実相に関する展示に、戦前、戦後の沖縄の歴史を追加するとともに、子ども達が未来を展望するゾーンとして、子ども・プロセス展示室や情報ライブラリーなど、国際理解や環境問題、人権問題なども含めた平和発信・平和学習の機能も備えている。

しかしながら、開館から24年が経過し、経年による施設・設備の老朽化に加え、開館後の歴史的事実の追加や、『沖縄県史』等の沖縄戦に関する新たな調査・研究に基づく記述等を踏まえた説明文の見直し等、時代に即した展示内容の更新が必要になっている。

加えて、日本語を母語としない人や障がいのある方等、多様な来館者に配慮し、多言語化や展示手法等の見直し、平和学習の場としてさらに活用してもらうための施設機能の充実が望まれる。

戦後80年を前に、広島平和記念資料館や長崎原爆資料館、ひめゆり平和祈念資料館など、県内外の平和博物館においては、戦禍の記憶を風化させず、次世代に継承するため、展示リニューアルに取り組んでいる。

本県においても、戦争体験者が1割未満となり、戦争体験者なき時代に向かう現在は、大きな分岐点にさしかかっており、近年の若者にとって、沖縄戦は遠い過去の歴史になりつつある。沖縄戦の実相と教訓を伝える平和発信拠点施設として、次世代に向け、自分

事として、我が身に置き換える「共感力」や、「危機感」をどう引き出せるかが大きな課題となっている。

ガザ地区でのイスラエルとパレスチナの軍事衝突や、ロシアによるウクライナ侵攻、台湾有事の懸念など、国際情勢が不安定な昨今においては、沖縄戦から時間が経過するほどに、平和発信拠点施設としての役割はますます重要になっている。

これらの課題に対応し、世界の恒久平和の実現に寄与するためには、展示リニューアルを通して、沖縄戦の記憶を風化させず、未来の若者達の心に響く展示内容について、模索し、より一層、発信力のある平和祈念資料館に生まれ変わる必要がある。

現資料館の展示更新にあたっては、旧資料館から引き継いだ「設立理念」と「展示むすびのことば」を継承し、老朽化に対応した設備の整備と併せ、時代に即した展示更新を実施し、平和学習等の施設機能の充実と、様々な事業活動が効果的に展開できる体制を整え、平和発信の拠点施設として、より一層の発信力の強化を図る。

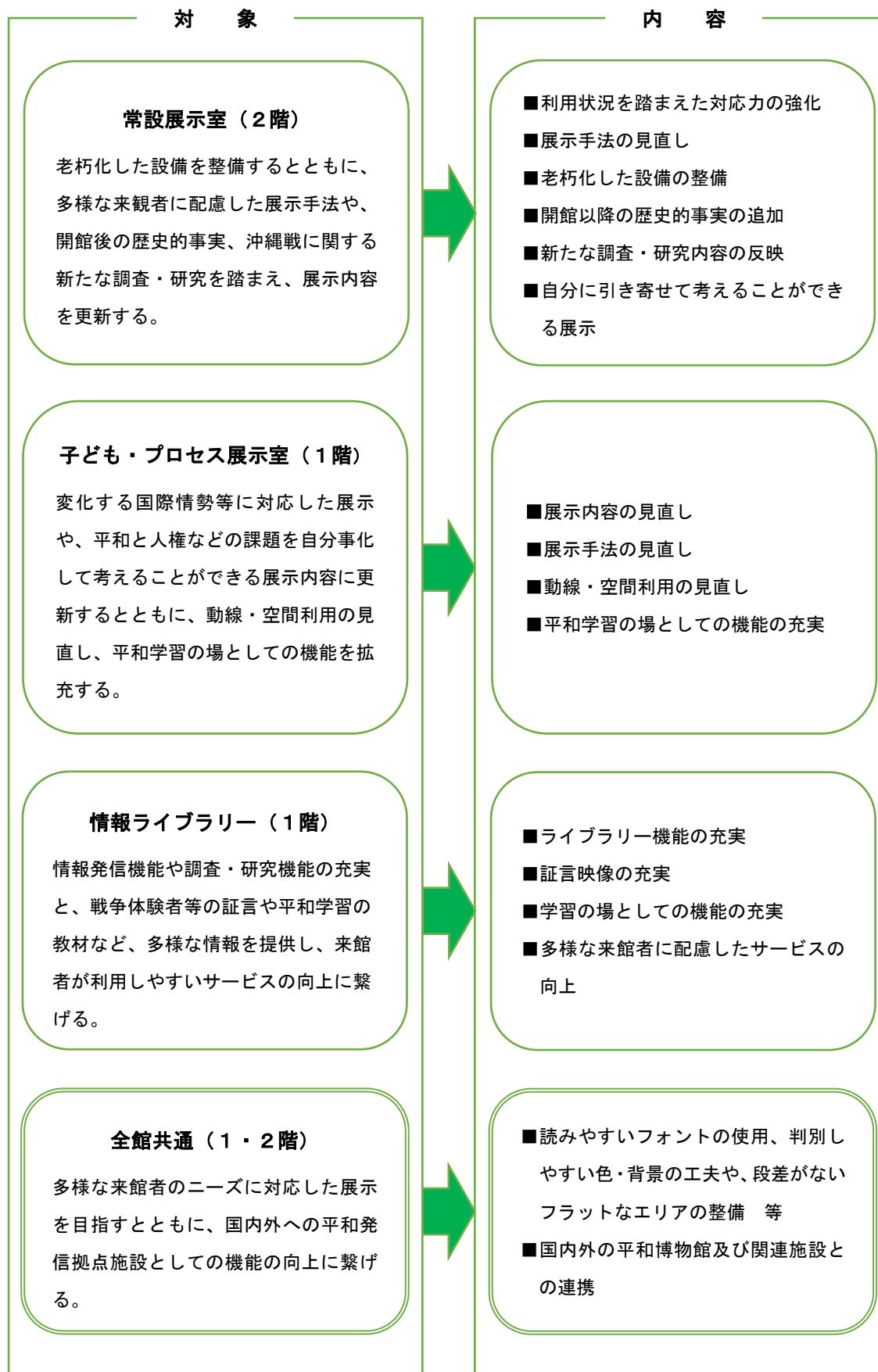
なお、現資料館の開館前に、監修委員会の承諾を得ずに展示内容の変更を行う事態が発生したことを踏まえ、今回の展示更新にあたっては、監修委員会の議論を適宜公表するなど、透明性の確保を図るとともに、来館者や多くの県民の意見も取り込んだ展示内容を検討する。

（２）展示更新における基本方針

- ① 沖縄県平和祈念資料館の「設立理念」と「展示むすびのことば」を継承した展示更新とする。
- ② 誰一人取り残さないSDGsの理念に基づく多様な来館者に配慮した展示更新とする。
- ③ 平和について学習する場の充実を目指した展示更新とする。
- ④ 「平和の礎」との連携を意識した展示更新とする。
- ⑤ 国内外の平和博物館及び関連施設との連携を目指した展示更新とする。

（３）検討対象

展示更新は、原則、次の範囲を対象とし、具体的な規模、手法はコストと合わせ検討する。



2 展示更新の内容

(1) 常設展示室（2階）

① 現状

常設展示室は、2000（平成12）年の開館以来、展示更新は行われていない。

開館から現在までに『沖縄県史各論編6 沖縄戦』をはじめ、各分野の新しい『沖縄県史』が発刊されるなど、沖縄戦と女性史を含む沖縄の近現代史に関する新たな調査・研究の成果が蓄積されており、第1室から第3室は、それらを踏まえて展示構成、説明文の見直し等が必要となっている。

戦後の沖縄をテーマとする第5室においても同様に、新たな研究成果を反映させるとともに、米軍基地に関連する主な出来事（事件・事故など）や、近年の沖縄をめぐる軍事強化など、開館以降の歴史的事実も追加する必要がある。

展示設備についても、システムの経年劣化による故障や、展示説明文が見えづらくなっている箇所が見受けられ、修繕または取り替えが必要である。

また、第4室の証言集や証言映像についても、証言本の劣化や、近年増加する外国人来館者に対応するための外国語表記や音声ガイダンス機器等の不足のほか、機器の故障なども出てきている。

② 課題

ア 利用状況を踏まえた対応力の強化

当資料館には、県内外から多数の児童・生徒が平和学習に訪れるが、観覧時間に制限があるため、時間をかけて展示室を観覧することができず、通り過ぎる程度になってしまうケースも多く見られる。

また、展示が、児童・生徒たちの興味・関心を引き出せていない、内容が難解すぎるとの指摘もあり、沖縄の近現代史に関する情報や知識をあまり持ち合わせていない児童・生徒への対応が課題となっている。

一方で、より広く・深く知りたいという専門性の高い学習ニーズにも対応することも求められており、双方のニーズにより的確に対応できる展示構成の見直しが課題となっている。

イ 展示手法の見直し

近年増加傾向にある外国人に対応した多言語解説の充実や、高齢者や障がいのある方等の多様な来館者に配慮した展示手法の見直しが課題となっている。

また、疑似体験など、体験性を高める先端技術の導入や、携帯端末のアプリケーションによるガイダンス等、ICT技術を活用した効果的な展示手法を取り入れる必要がある。

さらに、デッドスペースがいくつか見られ、空間やスペースを活用しきれていない状況があり、周辺のスペースと組み合わせ、動線、見学場所の改善を図る必要がある。

ウ 老朽化した設備の整備

第2室のメイン展示は、スクリーンに映し出される米軍記録映像と、ジオラマ上に展開するレーザーポインターによる演出が連動して、「沖縄戦の戦闘経緯」を伝える仕組みとなっているが、システムの経年劣化でほとんど機能していない。

こうした状況をはじめ、各展示室において、修繕・取替が必要な設備が多く、解説パネルやキャプションについても、老朽化により見えづらくなっている箇所が見受けられ、設備の更新又は新設が必要である。

エ 開館以降の歴史的事実の追加

第5室においては、米軍基地から派生する事件・事故の説明文の見直しや、沖縄県の置かれた状況など、1998（平成10）年以降の展示内容の追加が必要となっている。

一方、スペースが狭隘なため、テーマ及び展示内容の精選、展示構成の見直しが必要である。

オ 新たな調査・研究内容の反映

新しい『沖縄県史』が編纂されたことをはじめ、沖縄戦と女性史を含む沖縄の近現代史に関する調査・研究の成果が蓄積されている。こうした最新の研究成果を取り入れた展示内容に更新することが求められている。

カ 自分に引き寄せて考えることができる展示

戦争体験者なき時代を迎えつつある今、若年層にとって「沖縄戦」は遠い過去の歴史になりつつある。戦争を身近に捉えることが難しくなっており、沖縄戦の実相や教訓を、他人事ではなく、自分に引き寄せて感じ・考えることができる展示の構築が、大きな課題となっている。

③ 展示更新の基本的な考え方

ア 利用状況を踏まえた対応力の強化

平和学習を目的に訪れる児童・生徒等は、観覧時間に制限があり、基礎的な情報をあまり持ち合わせていない。このような来館者に対応する上で、基礎的な内容を中心に、短時間でもポイントを絞って効率よく体系的に学ぶことができる方法を整備するとともに、一方では、より高度で専門性の高い内容を求め、深く考えたいというニーズにも的確に対応できる展示と解説システムの構築を行う。

また、沖縄県内の来館者の関心に応えると同時に、県外からの来館者に、沖縄の問題を自らの問題として理解し、考えることができるような内容・方法を検討する。

イ 展示手法の見直し

国内外に平和を発信する施設として、日本語を母語としない人に対応した多言語化を充実させるとともに、高齢者や障がいのある方等が、観覧しやすいよう、展示ケースの側面をガラス張りに変更するなど、多様な来館者に配慮した展示手法の見直し

しを検討する。

また、来館者に沖縄戦の惨禍を、よりリアルに体験してもらうため、3D などの立体映像を活用した展示や、AR（拡張現実）、VR（仮想現実）、プロジェクションマッピングなどの先端技術の導入、来館者の利便性向上のため、携帯端末のアプリケーションによるガイダンス等、ICT 技術の導入も含め、展示手法を検討する。

ウ 老朽化した設備の整備

経年劣化により故障等不具合のある展示設備については、取り替えまたは修繕するとともに、旧式の展示設備については、先端的な展示設備の導入も検討する。

また、老朽化して見えづらくなっている解説パネルや説明文についても、来館者が読みやすい文字や色づかいを考慮しながら更新するとともに、多様な来館者に配慮した多言語化、展示手法についても検討する。

エ 開館以降の歴史的事実の追加

第5室における、1998（平成 10）年以降の主な出来事として、沖縄国際大学への大型輸送ヘリ墜落や、女性への性暴力等の米軍基地から派生する事件・事故、環境問題、今なお残る基地の現状や近年の軍事強化など、沖縄県の置かれている状況について、展示内容を追加する。

なお、新たな展示内容を追加するにあたっては、第5室のスペースが狭隘であるため、効果的な空間活用や展示構成、展示手法について見直す。

「変貌する世界情勢」や「未来への平和創造」、「国際連合」、「NGO」などの国際情勢に関する展示については、1 階の子ども・プロセス展示室の展示内容と合わせて展示構成を検討する。

オ 新たな調査・研究内容の反映

新しい『沖縄県史』をはじめ、沖縄戦と女性史を含む沖縄の近現代史に関する調査・研究の成果を踏まえ、新たな視点の導入、発信する情報の精査・更新、展示構成の見直し、解説文の更新など、最新の研究成果を取り入れた展示内容となるよう検討する。

カ 自分に引き寄せて考えることができる展示

来館者が、沖縄の近代から今日に至るまでの歩み、特に沖縄戦や基地問題を他人事ではなく、自分に引き寄せて感じ、そして考えることができる展示を目指し、研究成果に基づいた基礎的な事実を提示すると同時に、来館者に問いかけて、自ら考えることを促す効果的な展示手法を検討する。

また、当資料館と「平和の礎」との連携を意識した展示を検討する。

(2) 子ども・プロセス展示室（1階）

① 現状

子ども・プロセス展示室は、グローバル化が進む社会情勢のもと、世界に向けて平和を発信するという当資料館の設立の目的から、未来を担う子ども達に、国際理解と平和の概念の普及を促進するとともに、平和を愛する心を育む場として設けられた。

しかしながら、展示されている世界各国の状況は開館当時のままであり、現在の国際情勢の内容にそぐわないものになっている。

また、展示されている各国のおもちゃなどについても、壊れて使えないものが多い。

② 課題

ア 展示内容の見直し

開館から24年が経過し、世界各国の状況、国際情勢は変化しているものの、展示物は固定化されており、構造上の問題から、展示内容を更新できない状況にある。

また、現在展示されている世界各国の「遊び」は、今では「昔の遊び」になっており、壊れて使えないおもちゃも多い。

さらに、世界の戦争・紛争、国際理解、いじめなどの人権問題、環境問題について、知り、考え、意見を出すプロセスを実践するという展示室全体のコンセプトが理解しづらくなっている。

このため、変化していく国際情勢に対応し、更新可能な展示のあり方や、平和や人権などの普遍的な課題について自分事として考えられるような、展示内容等について検討する必要がある。

イ 展示手法の見直し

展示物の構造上、予め作り付けて設置されているため、時代の変化に対応した展示内容に変更ができない。

このため、柔軟に展示物の更新が可能となるような展示手法の見直しが必要である。

ウ 動線・空間利用の見直し

同展示室は入口・出口が明確でなく、順路もない。各展示が機能的に結びついていないこともあり、展示室全体のコンセプトがわかりづらくなっている。

1階部分の大きな面積（518㎡）を占めているが、展示物が時代に見合わないものが多くなっていることに加え、これらの固定的な展示物が前面に配置されている。

このため、子どものための企画展は、「ゆいまーる広場」にて開催しているが、展示室の奥側に位置し、来館者から見えづらく、うまく誘導できる配置にはなっていない。

また、「親子や友人同士で平和について語り合える場」であることもコンセプトにしているが、語り合える場が明確でないため、展示室全体の動線やスペースの利用方法も検討する必要がある。

エ 平和学習の場としての機能の充実

来館者が、過去の歴史と現代の課題を認識し、そこに存在する構造的暴力の問題に意識を向け、正解のない問いと向き合い、それらを克服するための多様な選択の可能性があることを自ら認識できるよう導くためには、戦争が起こる背景や、その他の社会的な様々な問題について学習を深め、これらを自分事として捉え、主体的に平和創造の担い手となる人材を育む学びの場とする必要がある。

2階の常設展示室での内容と、1階の展示室の内容を、過去と未来と位置づけ、多角的な視野から、過去の歴史を学習することの重要性や、これらを通して、現在の国際情勢についても理解を深め、共感力を引き出し、1階と2階の展示室、「平和の礎」を往還する学びの空間として捉え、相互に関連付けられた事象であることを学習できる場としての機能を充実させる必要がある。

③ 展示更新の基本的な考え方

ア 展示内容の見直し

本展示室の立地条件を生かし、より「平和の礎」との結びつきを意識するような展示内容を検討する。

例えば、「平和の礎」の刻銘者とその家族、あるいは刻銘者と関わりのある人々を取り上げることで、展示と「平和の礎」を往還する学びの空間と捉える。

そして、戦争の犠牲者一人一人が名前を持った“自分と同じ一人の人間である”こと、自分と近い年齢の人がいたことなど、自分事として戦争を追体験できるような構成にすることが考えられる。

その際、「平和の礎」が、世界の恒久平和を願い、一人一人の生命と平和を何よりも大切にする“沖縄のこころ”の象徴であることから、国籍や軍人、民間人の区別なく、沖縄戦などで亡くなられたすべての戦没者が刻銘対象となっており、個々人それぞれに多様な戦争体験があったことに留意する。

イ 展示手法の見直し

予め作り付けて設置されているという展示物の構造上、時代の変化に対応した展示内容の更新ができていない。

デジタルディスプレイを導入するなど、柔軟に展示内容の更新が可能となるような展示手法を検討する。

沖縄戦の教訓や、沖縄戦の歴史的事実に関しては常設的な展示にすることや、テーマによって展示のあり方を変えるなど、展示手法について柔軟に検討する。

また、来館者の興味・関心を引き出し、積極的に展示を見学してもらうために、先端技術を導入するなど、より効果的な展示手法のあり方も検討する。

子ども、高齢者、障がいのある方、あるいは海外から来た人や海外にルーツを持つ人、日本語を母語としない人など、多様な来館者が理解できるように、「やさしい日本語」の使用、音声での解説、多言語化、ビジュアル資料の多様など、展示の表現に

についても検討する。

ウ 動線・空間利用の見直し

「平和の礎」と関連した、沖縄戦を体験した人々に関する展示、沖縄戦の事例から戦争・人権問題などの世界的・現代的な課題を考える展示と、動線を明確にすることで展示室全体のコンセプトについて理解しやすくなるように工夫する。

それに加えて、情報ライブラリーに誘導するような動線や、情報ライブラリーにある図書を案内するなど、情報ライブラリーとの連携が強まるような工夫も必要である。

また、来館者同士が平和について語り合える空間となるように、学び合いができるようなスペースを設けるなど、空間の利用方法についても検討する。

エ 平和学習の場としての機能の充実

来館者が、2階の常設展示室を観覧後、1階にて、実弾等に触れられるスペースを確保することによって、沖縄戦についてより理解が深められ、視覚障がいのある方でも触れることにより、戦争の恐ろしさを体感することができる。

また、「平和の礎」刻銘者に関する展示や、例えば2024(令和6)年現在で言うと、パレスチナ自治区ガザでの紛争やウクライナ情勢など、「今」、世界で起こっている出来事を、1階展示室で観覧後、2階の常設展示室における沖縄戦の実相をより詳しく学ぶことにより、来館者が過去の歴史を学習しつつ、現在の世界的な課題についても理解を深め、過去と未来を関連付け、身近に起こり得る危機について、自分事として考え、何ができるのかを学習する場となるようにする必要がある。

さらに、再来館を促せるよう、身近な時宜を得たテーマを取り上げ展示することにより、1階と2階の展示室を、交互に行き来したくなるような学習の場としての仕掛け作りと、学習の場としてのコンテンツが充実するよう検討する。

(3) 情報ライブラリー（1階）

① 現状

情報ライブラリーでは、数多くの図書・雑誌を閲覧できるほか、AV（音響映像）ブースでは戦争体験者の証言映像等も見ることが出来るが、経年劣化による故障により、映像等が視聴できない機器も多い。

また、1階の子ども・プロセス展示室の右隣奥側にあり、来館者の目に留まりにくく、利用者が少ない状況にある。

② 課題

ア ライブラリー機能の充実

平和学習や調査研究活動を支援するため、沖縄戦や平和に関する書籍のさらなる充実を目指すとともに、利用者の利便性の向上のため、利用しやすい書架や学習スペース等の配置の工夫や、一部図書の貸し出しについて検討する必要がある。

イ 証言映像の充実

2階常設展示室の第4室においては、戦争体験者の証言集や証言映像を多数展示しているが、個々の来館者の観覧時間の制約により、時間をかけて証言を視聴することが難しい状況にある。

このため、別の機会に無料で視聴できるように、1階の情報ライブラリーにおいて、第4室と同様、証言映像コーナーを設置しているが、老朽化による映像機器の故障が多く見られ、設備の更新が必要である。

また、2020（令和2）年度から取り組んでいる「戦後の戦争体験者証言」、2022（令和4）年度に収録した「米国統治下時代の証言」についても、追加して視聴出来るようにする必要がある。

さらに、戦後79年が経過し、当時の暮らしや慣習を知らない人が多いため、証言映像は字幕の追加に加え、証言に出てくる用語の解説や、場所を示した地図などを追加する必要がある。

ウ 学習の場としての機能の充実

学生等が、常設展示の理解を深めるため、当資料館で作成したワークシートやクイズコーナーを活用して学習したり、学校教諭や平和ガイドなどが、平和学習のために必要な教材や資料を入手したり、平和学習を進めるためのノウハウなどを相談しやすい環境づくりが必要である。

また、来館者が気軽に立ち寄り、ゆっくりと腰をかけ、研究や学習に集中できるような空間づくりが必要である。

エ 多様な来館者に配慮したサービスの向上

子どもをターゲットにした子ども・プロセス展示室の右奥側に隣接したスペースに位置しているため、高齢者や車椅子利用者等、多様な来館者が利用しやすい動線配置とはなっていない。

子どもだけでなく、高齢者も含め、車椅子利用者やベビーカーの利用者、障がいのある方々にとっても利用しやすく、幅広い年齢層の利用者のニーズに対応できる情報発信が可能な施設となるよう整備する必要がある。

③ 展示更新の基本的な考え方

ア ライブラリー機能の充実

平和学習や調査・研究活動を支援するため、幅広い年齢層の多様な来館者のニーズに対応できるよう、沖縄戦や平和に関する書籍のより一層の充実を目指すとともに、来館者の利便性向上のため、一部図書の貸し出しについて検討する。

また、再来館につなげられるように観覧動線を考慮し、利用しやすい書架や学習スペース等の配置などを検討する。

イ 証言映像の充実

2階常設展示室の第4室における、戦争体験者の証言集や証言映像が、無料で、時間をかけて視聴できるよう、1階の情報ライブラリーにおける、証言映像コーナーの映像機器の更新や増設などを検討する。

また、2020（令和2）年度に収録した「戦後の戦争体験者証言」、2022（令和4）年度に収録した「米軍統治下時代の証言」についても、視聴可能となるよう追加を検討し、日本語を母語としない人でも視聴可能となるよう多言語化への対応も検討する。

加えて、字幕や証言に出てくる用語の解説、場所を示した地図などの追加も検討する。

ウ 学習の場としての機能の充実

学生等が、常設展示の理解を深めるため、当資料館で作成したワークシートやクイズコーナーを活用して学習したり、学校教諭や平和ガイドなどが、平和学習のために必要な教材や資料を入手したり、平和学習を進めるためのノウハウなどを相談しやすい環境づくりを検討する。

また、来館者が気軽に利用できるような動線の工夫と、ゆっくりと腰をかけ、研究や学習に集中できるような空間づくりを検討する。

エ 多様な来館者に配慮したサービスの向上

子どもだけでなく、幅広い年齢層の利用者を誘導するための動線の配置について検討するとともに、日本語を母語としない人向けの多言語サービスや、障がいのある方などの利用者の多様なニーズに対応し、情報発信が可能となるよう、様々なサービスの向上を目指し、検討する。

第2章 八重山平和祈念館（分館）

1 展示更新の趣旨

（1）経緯

八重山平和祈念館は、「マラリア慰藉事業」の一つとして設立された。

沖縄戦末期、八重山諸島では日本軍による命令でマラリア有病地帯に疎開させられ、3千余名の尊い命が失われた。米軍との地上戦もない中で、多くの住民が強制疎開させられ犠牲となった沖縄戦の実相を「戦争マラリア」と呼ぶ。これらの犠牲を含めて、沖縄県は、1973（昭和48）年から沖縄戦被災者補償を国に要請していた。

他方、「戦争マラリア」で亡くなった住民の遺族らは、1989（平成元）年に「沖縄戦強制疎開マラリア犠牲者援護会」を結成し、政府に対し「戦時中の八重山地域におけるマラリア犠牲者国家補償に関する陳情書」を提出した。

1995（平成7）年、政府による戦後50年問題プロジェクトチームは、「マラリア問題は重要な検討項目」と位置付け、日本軍による疎開命令によって戦没したという特異性を重く受け止め、1999（平成11）年に八重山地域を対象とする慰藉事業の一つとして八重山平和祈念館が設立され、沖縄県平和祈念資料館の分館として位置付けられた。

八重山平和祈念館は、沖縄戦や「戦争マラリア」の実相を後世に正しく伝えるとともに、人間の尊厳が保障される社会の構築と、世界に向けて恒久平和の実現を訴える「平和の発信拠点」という基本理念を掲げている。開館以降、八重山の地域の人々や修学旅行生をはじめ、県内外から延べ12万6千人を超える人々の来館があり、八重山地域における「戦争マラリア」の実態を中心に、戦争による悲劇の記憶や平和への思いを次世代へとつなげている。

しかし、展示の大半が「戦争マラリア」に焦点を当てたものとなっていることに対して、沖縄県平和祈念資料館運営協議会八重山部会委員から、「沖縄戦に至るまでの経緯の説明がない」、「マラリア防遏以外の戦後復興についても展示が必要では」などの指摘を受けているが、これまで、この課題への議論・検討を進められていない。

また、沖縄県平和祈念資料館（以下、「本館」という。）の分館として、本館の理念に示された「人間の尊厳を何よりも重く見て、戦争につながる一切の行為を否定し、平和を求め、人間性の発露である文化をこよなく愛する心」という“沖縄のこころ”を踏まえた、より広い視野から展示内容を見直すべきとの指摘も上がっている。

さらに、開館から25年が経過し、経年により展示物の劣化が進み、解説パネルの文字が読みにくい等の状況も生じており、展示物の修繕も課題となっている。

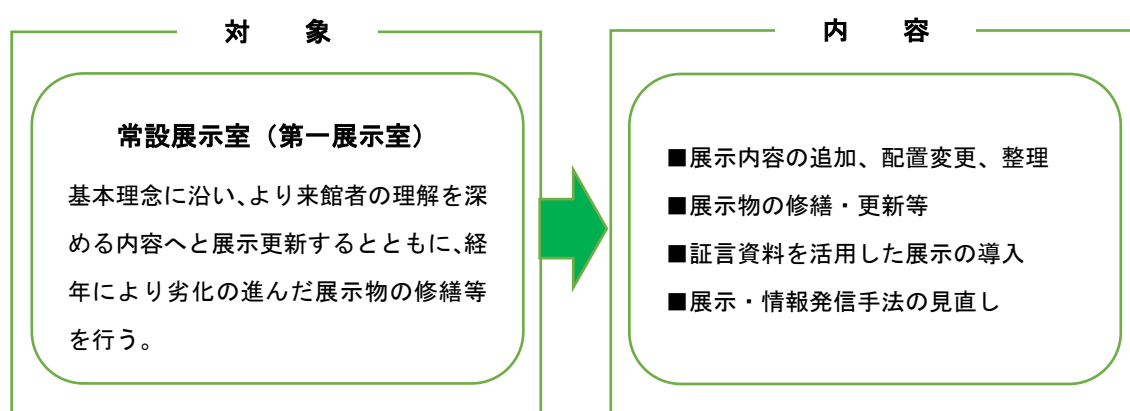
今回の展示更新に当たっては、展示内容の整理・更新を行うとともに、劣化した展示物の修繕等を行い、平和を発信する拠点施設として展示内容のより一層の充実を図る。

（２）展示更新における基本方針

- ① 八重山平和祈念館の『戦争マラリア』の実相を後世に正しく伝えるとともに、人間の尊厳が保障される社会の構築と、八重山地域から世界に向けて恒久平和の実現を訴える『平和の発信拠点』の形成を目指す。」という基本理念に沿った展示更新とする。
- ② 本館である沖縄県平和祈念資料館の理念、そこに示されている“沖縄のこころ”を踏まえた展示更新とする。
- ③ 誰一人取り残さないSDGs の理念に基づく多様な来館者に配慮した展示更新とする。

（３）検討対象

展示更新は、原則、次の範囲を対象とし、具体的な規模、手法はコストと合わせて検討する。



２ 展示更新の内容

（１）常設展示室（第一展示室）

① 現状

常設展示室は、1999（平成 11）年の開館以来、展示物の返還に伴う入替など一部の変更はあったものの、全体的な展示内容の整理・更新が行われておらず、劣化が進んでいるものもある。

② 課題

ア 展示内容の追加、配置変更、整理

八重山平和祈念館（以下、「分館」という。）では、設立経緯や『戦争マラリアの実相』を後世に正しく伝える」という基本理念から、「戦争マラリア」に関する資料や記録を中心に展示しているが、沖縄戦に至るまでの経緯や、マラリア防遏以外の戦後復興、周辺離島含む八重山全域における沖縄戦の実相に関する展示が不十分という指摘を受けている。

また、本館の設立理念“沖縄のこころ”を踏まえ、より幅広い視野から展示内容の見直しが必要との指摘も上がっている。

さらに、開館以降の沖縄戦等の調査・研究成果の反映、展示解説の充実や「戦争マ

ラリア」の用語定義、マラリア犠牲者数の数値等の検討が必要となっている。

イ 展示物の修繕・更新等

長期間展示されている展示物が多く、全体的に経年劣化が進行しており、特に戦争マラリア体験者が制作した「高熱に苦しむ母子像」の経年劣化は顕著である。

他にも、展示パネルの経年劣化や展示ケースに隙間ができていたり、展示設備にも不具合が生じている。

実物資料についてはレプリカを制作し、本体は適切に保管するなど、貴重な史資料を後世に継承するための対策が必要である。

ウ 証言資料を活用した展示の導入

戦争体験者の証言に触れてもらうことは、戦争を知らない人々に戦争の実相を伝える上で非常に有効であり、本館においても特に力を注いでいるところであるが、分館においては、そういった証言資料の活用が不十分となっている。

八重山地域でも、戦争体験記録の蓄積があり、これらの成果を生かし、より多くの人々と八重山で起きた沖縄戦の共有化を図る意味でも、証言資料を活用した展示を検討する必要がある。

エ 展示・情報発信手法の見直し

多言語解説の充実や、高齢者、障がいのある方等の多様な来館者に配慮した展示手法を検討する必要がある。

また、映像やインターネット、デジタルアーカイブ等を活用した展示や情報発信手法の活用を検討する必要がある。

③ 展示更新の基本的な考え方

ア 展示内容の追加、配置変更、整理

開館以降に調査・研究されてきた「戦争マラリア」の実相や、沖縄戦に至るまでの経緯、マラリア防遏以外の八重山地域の戦後復興に関する展示を追加する。

また、「戦争マラリア」という言葉や、マラリア犠牲者数の数値など、表現や解説の見直しを検討する。

加えて、周辺離島を含む八重山全域における沖縄戦の実相や、現代における戦争と平和をめぐるテーマの追加を検討する。

イ 展示物の修繕・更新等

劣化の激しい「高熱に苦しむ母子像」をはじめ、長年展示されている展示物の保存状態を確認し、修繕及び実物資料のレプリカ制作の必要性について検討するとともに、不具合の出ているケースなどの修繕についても検討する。

また、展示パネルについては、分館入り口（建物外）に設置されている「基本理念」のパネルをはじめ、劣化が進行しているパネルの取り換え・更新、不足している展示

物への解説の追加について検討する。

ウ 証言資料を活用した展示の導入

戦争の実相をより自分事として理解してもらうために、貴重な証言資料を多くの人々と共有することを目指し、八重山地域及び出身者の戦争体験記録の蓄積・成果を生かした展示の導入を検討する。

エ 展示・情報発信手法の見直し

多言語化を充実させるとともに、高齢者や障がいのある方等が観覧しやすいよう、展示ケースや展示パネルのあり方を見直すなど、多様な来館者に配慮した展示方法を検討する。

また、映像やインターネット、デジタルアーカイブ等を活用した展示や情報発信手法の活用を検討する。

第3章 本構想を踏まえた基本計画の策定

基本計画の策定について

本構想を踏まえた基本計画を策定する。基本計画では、展示項目や展示構成、ゾーニング等を検討する。なお、本構想において、更に検討を要する項目等については、基本計画、展示設計の中で検討を行うものとする。